

能楽研究 10巻 : 奥付

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	10
ページ	192-192
発行年	1985-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020359

佛教大学大学院研究紀要 第11号

佛教大学学会

文学史研究 第24号

大阪市立大学国語国文学研究室内文学史研究会

文芸論叢 第19号～第20号 (昭58)

大谷大学文芸研究会

文献ジャーナル 第258・261号 (昭58)

富士短期大学出版部

文林 第17号 (昭57)

松陰女子学院大学国文学研究室

宝生 第32巻4号～第33巻3号 (昭58・59)

わんや書店

みやび 第17号～第20号 (昭58)

コミュニケーションサービスKK

山邊道 第28号 (昭59)

天理大学国語国文学会

わかめ 第10号 (昭58)

耕春会

早稲田大学
坪内博士記念 演劇博物館 第49・50号

演劇博物館

CHANOYU Quarterly 第33号

裏千家茶の湯センター

× × × × ×

〔編集後記〕

今号には、文部省内地研究員として59年度後半に当研究所で研鑽を積まれた山梨大学の橋本朝生助教授に寄稿を願った。狂言史研究の基礎的史料の集成は前例がなく、同学を益するところ甚大であろう。多年の調査成果を提供された氏の御好意に感謝する。表所員の論考は、予測以上に北七大夫の生涯に問題点が多くて、今回で完結できなかった。未開拓であり過ぎた分野のせいとして、御寛恕を乞う。小田所員の論考は、型付の基本的性格の究明と、それを通して能の演出の幅や変動を把握することとを兼ねて狙っている。氏の健康回復を示す力作と思う。研究展望は西野所員の57年分と竹本所員の58年分を一緒に掲載した。これで展望が三年

ぶりで遅れを取り戻したことになる。

本誌もようやく十号に達した。この間、私はいつも長い論考を載せ続けた。紀要を持てなかった二十年間の無念さが身にしみているから、書かずにはおれないのである。今後書き続けるであろう。若い他所員にはその思いがなく、欲も少ない。歯がゆい思いがしないでもない。十号の区切りを機に次号から何か新機軸をともしうが、それよりは年度内ではなく年内に発行することが急務であろう。研究展望や能界展望が二年前のことになるのは恰好がつかない。中世文学会の事務局を引き受けて他所員に迷惑をかけていることが督励の声をにぶらせていたが、それも六月で終る。なんとか前年の展望の形に漕ぎつけたものである。(表章)

昭和六十年三月三十一日 発行

能 楽 研 究 第十号

102 東京都千代田区富士見二一七七一

〇三一二六四一九八一五

編集兼
発行者 野上 法政大学能楽研究所

記念 所長 倉持 俊一

印刷所 三和印刷株式会社

長野市川中島町一八二二一